

## ポケット ジャーナル



された愛称とシンボルマークはこれから出荷容器などに使われる予定。



こうべ旬菜のシンボルマーク

## ★ホテルプラザ神戸 六甲アイにオープン

9月27日、六甲アイランドの神戸ファッションプラザに「ホテルプラザ神戸」がオープン。海をテーマにしたカジュアルなリゾートホテルとして人気を集めそうだ。ホテルプラザ大阪から神戸に着任した西村大介常務取締役は「大好きな海の見えるところで働くことができて光栄。レンタサイクル（かもめ号）のサービ



西村大介  
常務取締役



ファッションプラザにホテルプラザ神戸がオープン

スなど、海の街六甲アイランドが楽しめるホテルとして皆様に可愛がっていただければ」と話している。ローザンヌホテルを引き継いでの開業だが、雰囲気は一転「山から海へ」。ロビーに飾られた俳優・緒方拳さんの書（魚がテーマ）も楽しく、一見の価値あり。

## ★神戸ブランド野菜 「こうべ旬菜」デビュー

10月より、神戸市内で有機・減農薬栽培された野菜が「こうべ旬菜」という名前で、神戸ブランド野菜として売り出されている。農林水産省が定めた表示ガイドライン区分における、五段階の基準をクリアした、安全で新鮮な野菜として、市内産野菜に親しみを持ってもらうのが狙い。一般公募

## ★オリンピア後援会 募集・募金のお願

社会福祉法人光朗会、特別養護老人ホーム・デイサービスセンター「オリンピア」が開所2周年を迎え、ますます充実した活動のために、後援会員の募集・募金への協力を呼びかけている。施設長の山口元氏を中心に、これからの時代にむけた、より先進的な老人福祉サービスをめざす。



センター内ではいろいろな楽しい催しが行われている

## 「誕生日ありがとう運動」 ただ今、建設中



長田の丸山では、総合福祉施設の建設が進んでいます。以前の地区は、丸山・あじさい・あけぼの・たも・松寿と、さまざまな施設がありました。近年、これらが大きなビルの中にまとまるのをとぞです。

丸山地区は、施設の子供達と地域との交流がとて盛んな所です。夏まつりには学園の園庭に屋台が出て、地域の子供会の祭りのように皆で楽しんでいました。二月三月にもそれぞれの学園が工夫をこらしてバザーや催しを行なっていました。もちろん自治会や婦人会も参加です。

しかし、建設工事の為二年ほどの交流がなくなっていました。それぞれの学園が分散してしまったので、バスで学園生を見かけることもありません。散歩中の園生に出会うこともありません。さびしいです。施設が完成しても又この行事が復活して、交流の輪が広がることを願っています。

そして今後、このような福祉施設が孤立した田舎にこもることなく、多くの住民と交流のできる場所に建設されることを願ってやみません。

— M. F. I —

誕生日ありがとう運動本部  
〒6500027 神戸市中央区中町  
通 4・2・11 村上ビルB1  
TEL/FAX 078・360・1257



公演中のスタッフの生き生きとした表情もみのがせない

■オリンピック後援会費・募金  
1998年度後援会  
個人会費1口5000円  
法人会費1口20000円  
開所2周年記念特別募金  
個人募金1口10000円  
法人募金1口50000円  
寄付金控除・法人税法損金算入可能  
振込先／郵便振込  
00980-9123033

社会福祉法人 光明会  
銀行振込三和銀行三宮支店  
普通5120341  
福 光明会後援会会長 村尾一夫  
問い合わせ／社会福祉法人光明会  
特別養護老人ホームオリンピック  
神戸市中央区生田町1-2-32  
☎078-221-7098  
FAX078-241-3745

## ★人形ショー劇団FP P神戸公演

カナダ、トロントを拠点に活躍している、知的障害者で構成される人形ショー劇団FP（フェイマス・ビートル・プレイヤーズ）が、一昨年に続き、2度目の神戸公演を行う。日本では、ニュ

ーステーションの取材で、一躍有名になった。ブロードウェイや世界各地の公演でも絶賛されている、ファンタジー溢れる、素晴らしい感動を是非味わってほしい。

### ■FPP神戸公演

日時／10月23日（金）24日（土）  
昼の部14時・夜の部18時30分開演  
25日（日）午前の部10時30分  
午後の部14時30分開演  
（開場はいずれの日も開演の30分前）  
会場／神戸朝日ホール  
料金／前売大人3800円 小人3000円 当日大人4000円 小人3200円（全席自由座）  
主催・問い合わせ／FPP神戸公演実行委員会  
☎078-707-6664

### ★劇団自由人会公演

坂本龍馬についての一夜舞台は冥界の一角。坂本龍馬について、彼と交わりのあった者が、それぞれの龍馬像を闇魔大王に語っていく事で、坂本龍馬という人物を多角的に浮かび上がらせていくという少しひねりの効いた設定。果たして、真実の龍馬像というのはいかに？というのが最大の見どころ。

### ■劇団自由人会公演

坂本龍馬についての一夜日時／10月24日（土）13時30分開演  
14時開演  
場所／垂水勤労市民センターレバントホール

料金／前売一般13000円・高小6000円 当日一般15000円・高小7000円  
問い合わせ／垂水勤労市民センター  
☎078-708-8901



間魔大王の最後の裁きとは？

## ★長江の水害に医療チーム派遣

兵庫県や神戸市など阪神大震災の被災自治体と国、企業、学識経験者などでつくる「日中上海・長江」神戸・阪神交易促進日本委員会（下河辺淳会長）が、6月中旬の長雨で膨大な被害を受けた長江流域の被災地に医療チームを派遣することを先月26日、発表した。また食料補給や治水事業など、今後の復興計画についても被災地同士として支援していく方針である。

## ★小規模作業所「くがの家」で雑貨などを販売

神戸市認可の小規模作業所「くがの家」では、

## ■神戸の本棚 ★詩集落としたボール 柴田実著



編集工房ノア  
2000円＋税

きょう／詩をつかまえた／青空に／鐘が鳴っている（詩）全行  
作者が十年間書き溜めた詩の数々。

光る海、山の色、坂の道、誰しも心の中心にある。美しきよき神戸の情景が、甘酸っぱい記憶とともに鮮やかに写し出され、みずみずしく謳われている。ちよびり辛い大人の味も、壊れてしまった美しい街への愛惜的でなく、日々の生活の中での小さな幸せを見逃さない。この詩集は作者の「神戸へのオマージュ」である。

★崩れた街の足がおじさん上之郷利昭著



講談社  
本体1600円  
（税別）

災害時に企業は何をなすべきか。普段まず問われることのない事だけに、すぐには答えられないだろう。本書は、某企業の震災ドキュメンタリーである。ここにもまた、ひとくくりに見えた「震災」からは決して見えてこないドラマがあった。まえがきで著者が引用している、「企業は社会に貢献し、人々の平和と安寧に資することを第一義とするがゆえに、その活動に必要な利益を得ることを社会から許されるのである」という松下幸之助氏の言葉が胸に残る。

98

# 啓介いろは歌



今井啓介 今啓パール(株) 社長

## その6 〈人徳いろは歌〉

(人生相談に来られた方に初句を挙げてもらい、即興で答えたもの。)  
平成九年三月八日作

い 情り 人間ならば あるものよ  
神に預けて 我が道を行く

れ 靈感を 先祖や神に問うならば  
神想観こそ 実相を観る

ろ 老人に 道を訪ねて 経験を  
学ぶ時には 素直な心で

そ それそれに 道はあるのだ なんんひとも  
迷わぬこそ 一点集中

は 花びらの ひとひつつ 生命あり  
我が命運に 繋いだの味ある

つ 包(つ)まれた 饅頭の味 含み味  
鮎(あん)にウス皮 程よい味わい

に 肉親の 有難いこと 我に有り  
又継なきゆく 吾子の命に

ね 根を強く 張った生き方 大樹なり  
今の私は 先祖のお蔭

ほ 養めことば 人を育てる 明かるさぞ  
いつとは無しに 自分も気付き

な 七日間 一心不乱 ふうんに 精心を  
七の倍数 人間そのもの

へ 平穏な 家・国・町の ありようは  
日々を重ねる 積善にあり

ら ラッキを 望んで進め いつの日も  
明るく清く 楽しい語らい

と 時が過ぎ 移り行く 世の 激しさに  
自然と流転 吾れものつて

む 無理をせず 流るゝ風水 音楽やが  
自然止めるな なんと麗わし

ち 地球一 やがて日の 本徳の国  
一歩一歩が世界に拡がる

う 売りがいは 互いに平等 心がけ  
これぞ真髓 長く継続

り 力量や 力だけでは 計られず  
疎で積む徳 大力量人

る 今からは 確り前見て 伸び伸びと  
山登る如地 地に足つけて

ぬ ルミニエ 光の國ぞ 人の寄る  
自分の心も 光りあること

の 折り返し 人の行く道 マラソンは  
走り切ること 自分のペースで

を 男(を)の子なら なんでも受ける 心意気  
これぞ本当の 大丈夫なり

お 悔の無い 若き頃より 今日の日も  
思い込んだら 命をかける

わ 若き日は 夢とロマンで 野を駆けて  
今は実践 何でも来てみる

く 遣り送ける これには 時間 間合あり  
呼吸ひとつを 間違わぬこと

か 改革を 心掛けたら 懸命に  
命を懸けてぞ 果せる日まで

ま 毎日の 行いなるぞ 事業とは  
商さない 飽きない 毎日新鮮

よ 良い日々を 送る未来は 今日の日  
決心実行 十年を待つ

け 経験は 尊いものぞ 失敗も  
困難苦難が 肥しとなるのよ

た 高き夢 水は低きに 流るゝぞ  
望み希望は 尊たためて下せよ

ふ 福来たる 来るか来ないか そんなこと  
言わず語らず 笑って迎えよ

た 望み希望は 尊たためて下せよ

ふ 言わず語らず 笑って迎えよ

ん 運のある 私の人生 人も来る  
来る人くるひと 運持つて来る

す ずんずんと 明るい希望と 夢を持ち  
信じて歩め きっと叶うぞ

せ 成功は 必ず必ず 出来るもの  
今日の善行 十年で咲く

も 求めれば 大きい程が 良いと云う  
大きく望んで 大きく咲こう

ひ 陽の当たる ベランダの花 良く咲くぞ  
我が仕事場は 陽の当たる杜(もり)

系 ミラクルは 才能超えた 山超えた  
無限の力は 自信と信念

し 生涯の 私の人生 人の為  
世の為に知る 吾れも貴(たか)まる

み 笑顔ある 家庭にしよう 会社迄  
事業繁栄(さか)える 家庭明るく

め 名実は一長一短 楽ぬもの  
一生かけてやれ 人生必勝

ゆ 勇気ある 決断の人 これぞこれ  
人も纏める 仕事も成功

き 最高の 人物と云う人 能力も  
才能ひとつ 自慢にしない

さ 段取りを 出来る余裕や 物事は  
人段取りも 整うものなり

あ 諦めず 商賣牛の 延よだれとか  
良くない時こそ 明るく振る舞え

て 客に示せよ 信用の素(もと)と  
ときはきと 特に失敗 ミスしても

え 栄光は 必ず来ると 信じよう  
例え時間は 掛かるとも来る

こ これからは 楽しくやろう 苦が来ても  
どんな時でも 感謝と謙虚

神戸うまいもん天国

絶賛発売中



★ご家族でお食事！

★おいしいもの食べたーいときに！  
★ご招待に！

●お問い合わせ先●

(有)月刊神戸っ子 〒650-0011 神戸市中央区下山手通

3丁目1-18 ツインズトアビル4F

TEL.078-331-2246 FAX.078-331-2795

本格的な  
こだわりの味!



- ラーメン 500円
- カレー 500円
- ギョーザ  
(大6コ) 280円
- 生ビール 400円

ラーメン・カレーの店  
**凡亭**

營業時間 午前11:00~午後 3:00

午後 5:00～翌朝 3:00

日祝日は 午前11:00～午後10:00

(年中無休)

**金曜サービス日**

生ビール  
ギョーザ 半額



神戸市中央区雲井通3丁目2-3 ☎078(261)2612

愛読者のためのコミュニケーションサロン



神戸っ子倶楽部新会員  
継続会員ご案内

■神戸っ子倶楽部では、ただ今会員を募集しています。会員の方には「月刊神戸っ子」を1年分お届けします。また、神戸っ子倶楽部の会報として、「月刊神戸っ子」の誌面上に、「神戸っ子倶楽部ニュース」を毎月掲載、会員の動きなど様々な情報を提供します。さらに年2回、文化性の高いイベント（コンサート、美術展、演劇など）に特別割引または無料でご招待いたします。年会費（入会金を含む）は1万円です。

神戸を愛する人たちのカルチャークラブ「神戸っ子倶楽部」。あなたもご入会になって豊かな神戸っ子ライフをお楽しみになりませんか。

会員の方は有効期限をお確かめのうえ、継続会員として年会費をお納めください。

□入会申し込み・お問い合わせは…

〒650 神戸市中央区下山手通3丁目1-18 ツインズ  
トアビル4F 有限会社月刊神戸っ子まで  
TEL: 078-331-2246 FAX: 078-331-2795

ぜっこうかい  
★神戸っ子倶楽部・舌耕会★

ホテルピエナ神戸レストランバトリ

「第8回素材こだわり塾」

日 時/10月23日(金)6:30p.m～

テ マ / 漁師と料理

サ ブ / 淡路島、湊漁港の漁師が称える秋の魚を料理する食事終了後に漁師とシェフの対談（聞き手、小泉編集長）

料理内容/淡路料理と銘打って、西淡路の海の幸と淡路牛のフランス料理コース  
（構成…前菜2品、魚料理、肉料理、デザート菓子、食後のお飲み物）

料 金 / 13000円（ワイン込み）

「神戸っ子倶楽部」では10席をご用意しております。お早めにお申し込みください。

■お申し込み

〒650-0011 神戸市中央区下山手通3-1-18

ツインズトアビル4F「舌耕会」係。

TEL.078-331-2246

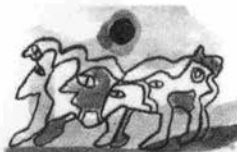
FAX.078-331-2795



総料理長 中村シェフ

神戸っ子通信

●神戸文化復興基金



震災で被災した芸術関係者への支援や、美術、音楽などの創造発表活動への助成、また工事現場での壁画の作成や、震災記録作品の制作発表活動への支援などを行う「アート・エイド・神戸」の活動を支える基金（委員長＝伊勢田史郎氏）を次の口座で受け付けている。○さくら銀行栄町支店 神戸文化復興基金 普通預金 3615811 問い合わせは事務局・海文堂ギャラリー TEL: 078-331-2467へ

●あしなが学生募金

震災遺児らの進学を支援する同学生募金。集まった募金は全額、災害、病気、病氣遺児らへ

の奨学金貸与を行う「あしなが育英会」へ寄付される。募金は郵便振替で受け付けている。口座「あしなが育英会震災遺児口」00100・1・171252

●異人館修復支援へ基金

大震災で被害を受けた神戸・北野の異人館修復など、神戸の顔として魅力を伝え続けてきた街を住民自身の手で守るため、地元の「北野・山本地区をまもり、そでてる会」が支援金を募っている。募金は郵便振替で受け付けている。口座「北野・山本地区をまもり、そでてる会」01160・1・60707 問い合わせは同会会長浅木さん方 TEL: 078-242-6288へ

●神戸復興支援義援袋

神戸商工会議所 WE LOVE KOBE 元氣復興委員会などの後援で、神戸有名店メーカーのご協力を仰ぎ、復興支援のため神戸の銘品をバックにした義援袋を全国各地で販売している。詰め合わせは3,000円・5,000円・10,000円の3種類。問い合わせは事務局・月刊神戸っ子 TEL: 078-331-2246へ

■神戸の工房をめぐる 〈その12〉

# 彫金の職人と婦人仕立服の職人たち

福元早夫 〈作家〉 撮影／米田英男

★ジュエリーの輝きに夢と希望  
『ウィキャン』

北区鈴蘭台東町二丁目の、閑静な住宅街の急な坂道をのぼりつめていくと、鈴蘭台高校の通用門にでる。そこを左折して直進していくと、宝石や貴金属の製造メーカー『ウィキャン』の工房があった。外観は高級マンションのようである。そこに四十名をこえる職人さんたちが、貴金属の輝きに手を加え、真剣に仕事とむきあっていた。若い男女の職人さんたちが目だった。いまから十六年前、中央区の下山手通で創業して、この地へ工房を移してから十年である。

「創業時の彫金師の世界は、家内工業の形で、



仲の良いウィキャンのスタッフたち



山迫さん(写真右)に説明を受ける筆者



ウィキャン自慢のオリジナルデザインリング

個々バラバラに仕事をしていました。それを『ウィキャン』として組織化し、工房をもつようになったのはじまりなんです」

代表取締役の村井健示さんは、工房の歴史を語ってから、「ここではより高度な品質管理と技術開発に取りくんで、職人さんたちが個性と才能を伸ばし、本当に価値のある宝飾品をつくりだしたいこうと、心をひとつにしています」

と工房の姿勢を述べ、さらに『ウィキャン』の企業理念をつけくわえた。

「時代に適合したものを開発する力をつけること、どんな時代にでもチャレンジしていく精神をもつこと、知恵と勇気を表現する力をつけること、この三拍子で世界の『ウィキャン』をめざして日進月歩の連続なんです」

村井さんのことばを裏づけるように、工房内は若やいで活気があふれ、だれもが彫金の技術を楽しんでいるといった明るい雰囲気だった。



いざいさと「ウィキャン」を語る村井健示社長



真剣な表情で作業をおこなう山下さん



仕上げる段階の山迫さん。長年の経験と勤がものをいう世界だ

山迫国光さんはこの道三十年の、彫金術の超ベテランの職人さんである。ここでは専務取締役で、彼の技術が『ウィキャン』を支えてきた、といっても過言ではない。

「子どものころから機械いじりが好きで、解体したり組立てたりする手仕事が好きでした。ですから学校をでると名古屋の自動車工場に勤めたいです。だけどそこは、流れ作業で、自分の技術を生かすことも伸ばすこともできないのです」

だから山迫さんは、真珠の加工技術者だった兄を頼ってこの神戸へやってきた。山迫さんと一緒に工房内を案内してくれた山下峰行さんも、この道二十七年のベテランの職人さんである。

「あのころ自分に適した仕事をさがしていたんです。そのとき出会ったのが『ウィキャン』だったわけです」

と笑顔で語ってくれた。ここではベテランの職人さんと若い技術者の、仕事の調和がうまくとれていて、それが製品に反映されているように見えてとれた。そこで山迫さんに案内されて、製造工程を見てあるいた。

指輪や首飾りなどの装飾品は、〈デザイン〉から始まる。取引先の要望に応じた新製品のデザインや、デザイナーがあらたに考案したデザイン画が見ごとに描かれていた。つぎが〈原形〉である。ここでは旋盤やボール盤などの機械加工にくわえて、特殊な技術を取り入れた新しい技術の開発が行われていた。手づくりが多く、デザイン画に沿って忠実に原形がつくられていた。

つぎが原形をゴム型につくり変える〈鑄造〉の工程である。鑄型ができると、遠心鑄造法や加圧鑄造法によって地金を流しこんでいく。鑄造物を水で冷却しながら水圧をかけて、埋没材を落してしまふと製品ができあがる。そこで〈仕上〉の工程にはいり、高速回転するフェルトや布の円盤に磨き粉をつけ、鑄造された製品を丹念に研磨していく。すると貴金属や宝石の美しい輝きと、職人さんたちの喜びが生まれてくる。最後がリングなどの〈石留め〉の工程で完成である。もちろん完成された製品は、指示された通りにできあがっているかきびしく検品される。

「自分のアイディアが仕事に反映されて、それがお客様の反応となつてとどいてきます。ここでは客の注文に不可能はない、という意気込みで全員一丸になつて挑戦しているんです」

とやさしい笑顔で山迫さんはきつぱりという。技術革新をした新しい商品に、お客はとびついてくれるという。

「天然石を扱っているので破損しないように、それに素材がもつ個性を

いかにひき出して生かすか、それが苦労ですが、反面ではそれが仕事の喜びで、自分の経験や技術を後輩にのこし、他社がやっていない技術を開発するために、工作機メーカーなどの他業種へ勉強へいつていますよ」

と、それが生きがいだと山迫さんはつけ加えた。

## ★客との対話が個性的な仕立服に『服飾ミロー』

「ここは店と工房が同居しておりますので、お客様と職人が直接触れあうことによって、お互いに信頼関係が生まれます」

と、いつて広い応接間へ案内してくれたのは『服飾ミロー』のご主人で、婦人仕立服の職人としてこの道四十年以上をあるきつづけてきた西條幹男さんである。場所はJR三宮から北野へむかつて歩いて約十分、山本通一丁目一五である。

「洋服づくりのポイントは、お客様のハートをいかに感得するかで、長い経験が必要とします。メジャーでサイズを測りながら、同時に心のサイズもはからなければならぬのです。仕立服は手直しを作らないこと、それが技術のみせどころなんです」

自信をもってそ



工房では、それぞれ自信と責任を持ち仕事をおこなう



西條さん(写真右)と和やかに談笑する筆者

いう西條さんは、服のサイズを測定するエルダー方式の器具を発明したアイデアマンでもある。この道のあるくために徹底的に勉強をしている。奥さんのやひろ夫人も同じ婦人服を仕立てる職人さんで、この道一筋に三十年以上も夫婦で二人三脚をつづけてきた。

「お客様が気に入られた生地をよそで買ってこられて、ここで仕立ててあげてそのお客様に満足をする、神戸ではここだけの純粋な洋服屋です」

よく似あう笑顔でやひろ夫人はそういつてから、

「クレームを出さないために職人の姿が見えるこの応接間で、お客様と徹底的に対話して、あとは職人同士の対話で一着の服を完璧に仕上げていきます。お客様の満足は自分たちの喜びですから、お客様本意の仕事をしているんです」

とまた笑顔をむけてきた。おどろいたことにこの十年あまり、仕立料金をすこしも値上げしていませんという。だからファンが多く、長つづきしている。神戸はむろんのこと、京都、奈良、大阪、阪神間の尼崎、西宮、芦屋から明石とつづいている。

ご主人の西條さんは淡路島の北淡町の



やひろ夫人(写真中央)を中心に、団結している工房のスタッフ



仕立てられた洋服は、フォーマルであると同時に着やすいデザインが多い



西條さんの、婦人服に対するこだわりは人一倍強い。お客様の要望に100%答えようとする職人気質がたくさんの人に支持されている

「よく聞かれるんですよ。でも仕事は仕事。それに分業制にしていますから、職場では同じ職人同士の仲間のようなんです。昼食を二人そろって外へ食べに行ったりするんですよ」  
西條さんがその言葉に笑顔でうなずいた。

出身で、父親が紳士服店を営んでいて、あとを継ぐかたちで紳士服の職人になった。その後神戸へでてきて修業をつみ、さらには東京洋服学校へ出て行って勉強をかさね、神戸へ帰ってミシン一台で『テーラー西條』として独立したのが二十四歳のときである。

それからまた苦労と努力をつみかさね、三十二歳の秋にやひろ夫人と結婚して、加納町三丁目のバス停前で『服飾ミロー』をスタートさせた。はじめは紳士服と婦人服の両方をあつかっていたが、ファッション性の高い婦人服により魅力を感じて今日に至っている。出発時は八畳と三畳と二畳と台所の、職場と住居をかねた間取りで、夫婦で力をひとつにしてがんばってきた。子どもたちも大きく立派に成長させてきた。

「お客様の希望されているデザインと、このスタッフの創造力が通いあって、理想的な洋服が仕上がったときはうれいすね。そのことは『服飾ミロー』の経営理念を現場の職人さんたちが理解してくれているということですから、感謝してい

ます。それが仕事を楽しくつづけられるエネルギーになっています」

西條さんはきっぱりとそういつてから、奥の工房に目をむけた。そこではミシンのはずむ音が、軽音楽のようにひびいていた。職人さんたちの仕事の対話が、明るい雰囲気をつくっていた。

「この仕事をつづけてきていちばん辛かったのは、十年前のバブル経済の時期に、平穩無事に仕事をしていたこの店舗が、地上げ屋に買収され、交渉が難航して日々の仕事手がつかなくなったことです。その四年間は眠れない夜があつて、もう営業ができなくなるのでは、と悩んだことがあります。そのとき、周囲の方々がいろいろアドバイスをしてくださつて、無事に解決することができました。感謝しています」

目をすこしうるませて西條さんはこちらに頭をさげてきた。いまの言葉で『服飾ミロー』は、多くの人々に支えられていることが感じとれた。

ここでは夫婦が同じ職場で仕事をしている。それも同じ服飾技術を競い合っている。そのあたりの、ライバル意識からくるトラブルなどはないのだろうか。やひろ夫人が白い歯を見せて明るくこたえた。

# 花隈・松通家ものがたり

うづの ようじい(エッセイスト)

## 【第九回】「ああ、人生は忙しい」

昭和四三年に松通家も区切りとして、創業五十周年のイベントを行うことになった。

時代の勢いとして店も母もぐんぐん伸びていったように思う。

元気な私は(いつもであるが早速、そのころ全盛であった旧神戸オリエンタルホテルを予約し、準備万端おこたりなく進行しているなかで、突然風邪をひいてしまった。それも、催しの三日ぐらい前。

当日までには治るだろうと、高をくくっていたら海星病院の北先生に、ナント!「ジフテリア」と告げられた。

「先生、本当ですか」

「そう、この病気は無菌体質の人がかかりやすく、云つてみれば皇居のなかにいる人がなるのよ」

「? ?」

祖母と母は当日私がいけないということで、ウロウロとパニックに陥っていた。

そのころ病院で、仮死状態であった私は、昇天しかけていた。字の如く魂がのぼるのである。

意識がすっかりあつて、カラダがグングン上へ昇

つていくのがわかる。人の声がフェードアウトして、徐々にボリュウムが小さくなり、果てに消音する。

しかし、そこはいつも強運の私である。

途中でカラダがストップになる。そして、今度はカラダが下降していく。と同時に周囲の声がフェードイン。気づかう人の声が徐々に近づいてきて、ついに着地。「生」の地に戻ってきたのである。

そんなこんな混乱のなかで無事、松通家の五十周年イベントは終わったが、私は依然として病院の隔離病棟にいられていた。

だから、ドクターもナースも宇宙服みたいなのを着て病室に出入りしていたが、悪ガキ友だちをもつ身として、毎日ナースの目を盗んで彼らは出入りし、あげくに私の食事まで全て平らげていったのであるから、何の隔離だと大笑いしていたものである。

京都からも祇園「富美代」の太田妃美子さんが隔離をものともせず見舞いにかけてくれた。

「大丈夫?」という私に「平気やわ、なんやの、元氣やないの」と叱咤しながら京都へ戻っていった。

祖母、母たちは私の心配より、イベントが無事終



## 45. HANAKUMA KOBE

昭和45年11月20日にオープンしたディスコ45。関西のナイトスポットとして一世風靡した

了した感慨のほうが強くて、よかったと涙声。  
オイ、オイ。娘、孫の心配をしないのか。

昭和四五年十一月の末に「くらぶ花くま」を閉店。  
ホステスのバンスとか引き抜きとかに嫌気がさしてが理由、そして弟(セイジロー)が「くらぶ花くま」の跡地に「ディスコ45」をオープンした。

そのころ、関西では「45」がディスコクラブのハシリであつたと後で聞いて知つたが、ともかく連日連夜、エライ人気で朝方まで外車などズラリ、花隈中央通りに溢れていたのである。

作家の陳先生や時の著名人、京都、大阪の遊び人がズラリ、ズラリ。

筆頭客は宝塚にあるお寺の住職サンであつたそうである。

お賽銭がディスコへいくとは。  
あまりの繁昌ぶりに、弟やスタッフが疲れ果て、ある日事件が起きる。そのハプニングに母と私が驚

愕し、怒り狂つたのである。

ディスコが閉まつている。それもドアに「〇〇日迄夏休み」と書いてあるだけ。

なんじゃ、これ！ 母と姉に何の断りもなく、弟のジープとスタッフが消えていた。

彼らはなんと炎天下、ジープを駆って温泉廻りの豪華旅行と思いきや、あびるほどお金を稼いでおいて、屋根のないボロジープに乗って、海辺に出かけ、宿にも泊まらず車に寝泊まりし、自炊して釣つた魚をおかずにして自然のなかでシンブルに生きていたわけで、雨が降ればビニールのゴミ袋を頭からかぶって動いていたそう。

そんな生活をしていたとは、こちらは全く知らず、毎夜毎夜、電話と車のクラクション、客がドアをたたきつける音のなかで、母と私はノイローゼ状態で怒りも頂点に達していた。

一週間たつて、やつと全員が真っ黒な顔で帰ってきた。スタッフのなかに仲居のヤスコも紛れ込んでいて「そんな黒い顔でキモノ着られないでしょ」と母にキツク叱られていた。

そしてまた、何事もなかったように、連日連夜、客が客を呼ぶ状態が続いていた。

バー・トムキャンティの姉さんは「あのころ、店が終わってからお客さんと『45』で待ち合わせして、カッコイイ服に着がえて朝まで踊り続けるのが一番の楽しみで、云つてみれば青春時代そのものだった」と当時をふりかえつてなつかしがる。

大勢のブレイボーイたちにとつても「45」はカッコつけられる居心地のいい場所であつたに違いない。

しかし、連夜の盛況が近所のクレームと正比例していったため、母は生田警察署に何十回と呼び出されていた。

はじめは、松適家さんの店だからと大目に見てもらっていたが、余りの騒音とその苦情の回数に警察も音をあげていた。

「もうやめて」という母の一言で、弟もカンタンに「そうしようか」となった。

昭和四七年。シンガポールのシャングリホテルから是非入ってほしいとレストランの要請がくる。

母も私も、その温暖な気候と風格あるゴージャスなホテルを一目見て気に入った。

条件もよかった。ゲートボール場のフィールドにオーナー側が日本建物

シャングリホテルのプールのある庭。のんびりとした雰囲気一度は出店へと心が動く



シャングリホテル視察のためのシンガポールを訪ねる。ホテル前で、弟、セイジロー

を作るという。

出資比率は四対六で六が当方である。

オーナーのミスター・リーは砂糖会社が主力である。

しかし、私は考えた。

ともかく、異国である。定住するような気構えがなくてはとても成功しない。ハンパな気持ちでは失敗する。正直そう思った。

知らない国で商いをする事の難しさはフツウの苦勞の倍以上ある。

気分で行進させていた自分に、一度さし水をする和驚くほど、事の決着がカンタンについていた。

ホテルのオーナー、ミスター・リーに謝意を表しながら辞退した。

今度はニューヨークからも話がきた。

エンバイヤアステートビルの一階にあるファーストナショナルシティーバンクからである。

一階で日本料理店をしてほしいと、たつての要請であった。

この話は「ベニハナ」のマネージャー斉藤氏に通訳などしてもらい進行していったが、結局、シャングリと同じく「NO」といわせてもらった。

赤坂東急ホテルで一番の稼ぎ手だった当店をあてこんで、札幌東急ホテルへ赴任が決まっていた当時の総支配人が要請元。

「ぜひ、札幌東急ホテルへ入ってほしい。条件は全部のむ。ホテルの地下に地下鉄の駅もできるので、フリーの客が見込めるから」と日参される。

その熱心さと地下鉄の線で重いお尻を動かすが、最初の辞退が心のなかで、依然としてくすぶり続け



東京が好況なため札幌店の赤字補填ができていた

ていたのも事実であった。

最初のイヤな予感というものは何でもよく当たるものだ。この心のくすぶりが、あとあと店展開の足を引っぱるようになった。やはり、地下鉄は入らずフリーの客も見込めないまま、惨憺たるスタートとなった。しかし、東京が好況なため札幌店の赤字補填は、いつも解消されていた。

当時、吉兆本店の修業を終えた弟は、ニューヨークの総領事公邸の料理長として活躍していたが、母の一言ですぐ帰国し、即、札幌店に向かった。

弟もがんばったが、札幌は当時まだ閉鎖性が強く、フリーの顧客誘致はむづかしかった。

しかし、ブレーボーイで名を売っている我が弟は、札幌の「チカル」「ミノ」といった超高級バーのホステス連中の個人的相談相手として大活躍していた。

反面、料理の腕は非常にたけていて、のちに大企

業のジュニアとの交流が多かった。

マネージャーであった石塚初雄がまた夜遊びにたけているので、いつのまにか顧客層も水商売関係と企業の札幌支店長で占められていたが、ともかく、札幌の人々へのアピールはほとんど遠いところにあった。

ただ、弟は吉兆育ちのため、料理場とのコミュニケーションを大事にしていたので、慰労会をしばしばひらいていた。あるとき動物園で開いたときに珍妙な事件が起こった。

一升瓶とお弁当をたっぷり持ち込んで花見の見物としやれた。

飲みや歌えの大騒ぎで、そのなかの料理場の一人が酔っぱらって、園内を一人ウロウロしていることに、誰ひとりとして気づかなかった。

彼はナント、ゴリラの檻を乗り越えて中に入ってしまったのである。

お酒の力の凄いこと。

中には屈強のゴリラが二頭鎮座していたが、そのゴリラが身をちぢめあつて、隅っこでふるえている。

その前で彼・S君は自分の胸をたたいて「ワァオーッ」と叫びながら、ゴリラに向かって説教(?)していたそうである。檻の外側のゴリラ見物の人たちは、そのさまにびっくりギョウテン。

「ゴリラが可愛そう!」と一一〇番。

パトカーが園内に入ってくるサイレンの音を耳にしながら、なお、もりあがっている店のスタッフは「アホな人間がいるなあ」。

まさか当店がらみの事件とは知る由もなかった。そんな「札幌花くま」であった。



左から、渡邊恭尚パーサー、長岡武人船長、新谷宗啓クルースタッフ



問い合わせ：パソナクルーザー (☎078-360-5600)

# 海 船 港

コンチエルト乗船記

海から見る神戸の姿は。

木村 光理

私の祖父は外国航路の船乗りだった。

半年ぶりに祖父が港に帰ってきた日、今は廃線になった臨港線の踏切を渡って、私は小旗を振りながら迎えにいった。

ポルトガルのボールペン、アメリカ製の真空管ラジオ、フランスのチョコレート……祖父から手渡された土産の数々。そこに異国の匂いが籠もり、異国の音が聞こえ、異国の味がし、異国の空気が漂っていた。

祖父は言った。太平洋を越えて内海に入り、



彼方の灯に思いをはせる



モザイク前から就航するミュージック・グルメ船「コンチェルト」



やがて日本の陸地が見えてくる。その時の感動は素晴らしい。とくに、海から見る神戸の姿は。

私は船乗りに憧れた。しかし、時代は進み、人間はコンピュータに取って変わられ、船はそんなに多くの人間を必要としなくなった。そんなわけで、今、私は陸地にしがみつき毎日を慌ただしく生きている。

だからこそ、時には船に乗って海から神戸を眺めてみたいと痛切に思う。それもゆつくりと時間をかけて、贅沢な食事と贅沢な音楽と贅沢な会話を楽しみながら。

そんな思いを満たすために、今、私はコンチェルトに乗っている。

夜の熱気と闇のベールを裂いて12ノットで船はゆつくりと進み、周りの海を大海に変えていく。

老若男女が、黒や白や黄色の肌が、一人で、カップルで、グループで、全長74m、幅13mの船の四つのデッキを行き交い、そこで繰り上げられる夢の時間。

甲板で風に吹かれていると、長い船旅への憧れが湧き上がる。このまま……その延長線上にある見知らぬ異国。

しかし幸せな時空はあまりにも早く過ぎ、真珠の橋の手前で船がUターンすると、ゴールがどんどん迫ってくる。明かりが濃くなり、やがて浮きドッグ、浮き上がった潜水艦、小さな遊園地のきらめき、観覧車のネオン、そそり立つ垂直なビル、クルーズの終焉……今夜、空の満月は少しかけ、霧が出たのか、星は見えない。しかし、コンチェルトは進み続けるだろう、不思議な空間を、見知らぬ国に向かって、遠く、遠く……